
Halo2.5:Beauty and the Beast

Sierra-312

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Hal o 2 . 5 : B e a u t y a n d t h e B e a s t

【Nコード】

N 5 3 7 2 Z

【作者名】

S i e r r a - 3 1 2

【あらすじ】

『大いなる旅立ち』の真実を知ったエリート族は、ゼル・ヴァダム(The l · V a d a m)とシップマスター アルタス・ヴァダム(S h i p m a s t e r R t a s V a d u m)を旗頭にコヴナント(C o v e n a n t)を離反した。

そして、ゼル・ヴァダム(The l · V a d a m)は人類 と手を組む事を決断する。

それによりエリート族 が一人である強化部隊所属のネモ・ヌルヴェ(N e m o N u l l i v e)は一人の女性兵士と出会い、様々な

戦場を駆け抜ける事となった。

ビギナー (Easy) (前書き)

H a l o 2 が終わり、H a l o 3 のはじまる寸前が舞台となります。
H a l o 3 : O D S T も若干絡む形となっていますが、過去である
H a l o : W a r s とH a l o : R e a c h が絡む事は在りません。
また、アメコミ及びアニメなどの内容も絡みません。

使用している資料は、H a l o : R e a c h 予約特典で付いてくる
資料とW i k i p e d i a 等です。

H a l o 3 をプレイし直しながら書いている為、更新は不定期となります。

ビギナー (Easy)

エリート族 (Elites) がコヴナント (Covenant) から離れて数ヶ月。

ボクが人間の部隊に入ってから2〜3週間くらい経つ。ゼル・ヴァダム (Theel·Vadam) 様が人類との一時的軍事同盟を希望したのが切欠となって、ボクたちエリート族は人間の部隊へと配属されていった。

配属されていないのは、アールタス・ヴァダム (Rtas Vadam) 様率いる Shadow of Intent とボクの数少ない友達くらいなものだろう。

友達のヌ・ソ・スラオム (N·tho Sraom) とウスゼ・タム (Usze Tam) は、ゼル・ヴァダム様と行動を共にしている。3人での単独行動から人間の海兵隊という部隊とも連携を取っているようだ。

それに比べ、ボクは戦場で戦える兵士が減ってきているという理由で、とある兵士とペアで行動する事になった。

なんでも人間側の特殊部隊 Orbital Drop Shock Troopers (オービタル・ドロップ・ショック・トゥルーパー) 所属だった女性で、所属部隊唯一の生き残りだそうだ。

Orbital Drop Shock Troopers というのは、人間の現主力である海兵隊が活動を見込めない場所に投入される部隊らしい。

個人用降下ポッドで宇宙艦から直接目標地点に落下して強襲を行うエリート中のエリートが揃った部隊だとか……色々と改造の施されているであろうスパルタン (Spartan) に比べ、純粹に鍛えた末に到達できる最高峰の部隊だとアールタス・ヴァダム様が言っていた。

敵地の背後、あるいはど真ん中に降下して戦局を打開させるため

の任に就くなんて、Shadow of Intentと全く同じじゃないかと思ってしまうた。

「ネモ・ヌルヴェ(Nemo Nulve)、何しているの？ さっさと行くわよ」

「うん。いま行くよ。それと、ボクを呼ぶ時はネモで良いって言ってるじゃないか」

「地球ではね。ネモっていうのは『誰でもない』って意味なの」

「ボクはエリート族だからそういうのは関係ないと思うけど？」

「私が嫌だからよ」

「うーん。それなら、ヌルとかはどうかな？」

「ヌルも『ないこと』っていう意味合いよ」

「……。ボクの名前って人間から見れば無い無い尽くしなんだね」

「そうね。だからヴェルとかどうかしら？ ヌルヴェからルヴェを取って置き換えてヴェルね」

「うん、ボクはそれで構わないよ」

「決まりね。それじゃ、ヴェル行くわよ」

そう言つてBR55HB バトルライフル(Battle Rifle)を構え、ドンドン進んで行くのが話題に挙げた女性兵士テレサ・リュック・ピカード(Teresa-Luc Piccard)だ。

周りにはあまり知られていないけれど、一応ボクの恋人だ。ペアを組んでから1週間、彼女が勇敢にブルート族、ハンター族を屠る姿を見ていたら惚れてしまった。他の同胞が言うには一目惚れというヤツらしい。

思い立つたが吉で告白した結果、いまに至る。

あ、ちなみにボクの装備は黒いコンバットアーマー(Combat Armor)だ。海兵隊の人が見つかり難い様にと迷彩色にしてくれたのでステルス状態にならなくても森や市街地などでは見つ

かり難い。

ボクは元々ステルス兵なので、このコンバットアーマーにはアクティブ・カモフラージュ（Active Cover）が内蔵されている。奇襲攻撃や狙撃が得意な特化兵だ。

たまに敵の後ろに近寄って、背後からエナジーソード（Energy Sword）で突き刺す事もするけど、ボク達ステルス兵の装備する黒いコンバットアーマーは、特殊部隊が装備する青いコンバットアーマーに比べると耐久力が低く、シールドも薄い。もちろん、一般兵に比べると随分と硬いんだけど……。

それでもやはり、ブルート（Brutes）の攻撃を2発耐えるくらいが限界だろう。

それにいまは、ペアで行動していてステルス兵としての本領を發揮する事はできない。手持ちの武器だって海兵隊からもらったSR99D-S2 オートマチック・スナイパーライフル（AM Sniper Rifle）と愛用のカービン（Carbine）だから、隠れて狙撃くらいしか出来ない。

でもやっぱし、ペアである以上はテレサと共に行動するので狙撃も難しい。

幸いカービンは全距離対応できる武器だし、敵を倒せば弾倉も手に入るから困る事はないけれど。

「それにしても、『大いなる旅立ち（The Great Journey）』だったけ？ その真実が知的生命体根絶だって分かったのに、なんで他のコヴナント達はいまだにヘイロー（Hallos）を求めるのかしら？」

前に行くテレサが不思議そうな口調で聞いて来た。

ボクもそれに関しては気になっていた。正直、プロフェツ族（Prophets）に関しては気に喰わないけど、コヴナントを仕切るだけ在于ってその智的能力はエリート族を上回っている。

だからこそ、脳のないブルート族（Brutes）すらも巧みに操る事が出来るのだろう。まあ、ボクたちエリート族からしてみれば、他種族を完全に見下し、傲慢の塊でしかない脳なしなんて駆逐すべきだと思う。

心情を少し挟んでしまったけれど、プロフェッツ族は頭だけは良い筈だ。だからこそ、一体何を考えているのかボクには分からない。ボクは現状を見て妥当だと思える推測とほんの少しの本音を口にした。

「きつと、ボクたちエリート族の事をプロフェッツ族が裏切り者として見ているから、ボクたちの言っている事も真実ではないとされているんだろうね。でも、たとえボクたちの事が信じられなかったとしても知的生命体の敵であるフラッド（The Flood）の根絶よりも先にヘイローを求める理由がボクには分からないよ。共同戦線を張って共通の敵であるフラッドを駆逐するのが先だと思うんだけどね」

「あれじゃないかしら？ 【大いなる旅立ち】が成功すればフラッドが消えるって考えてるんでしょうね。半分アタってるけど半分ハズレね。私たち知的生命体がいなくなるから、知的生命体を宿主にしなければ増える事ができないフラッドは次第にその数を減らしてゆく」

「フラッドの数が減る前にボクたち全員が絶滅する事が前提条件。フォアランナー（Forerunner）も本当に追い詰められていたみたいだね」

フォアランナー。

遙か昔、人類（Humans）よりもコヴナントよりも優れた文明を築いていた種族。人間の神話に喩えるのならば、黄金の時代を生きた生命と言っても変わりはないと思う。

そのフォアランナーがフラッドと呼ばれる謎の寄生生物と戦いを

始めるのが白銀の時代。なんらかの理由でフォアランナーが滅び、フラッドが封印されるのが青銅の時代。人類とコヴナントが戦争をはじめ、まだ人類側に多くのスパルタンが存在し、戦いに均衡が保たれていたのが英雄の時代。コヴナントが内部から瓦解し、ボクたちエリート族 が離反、大いなる旅立ちの真実が露になり、人類とエリート族 の連合対コヴナントの戦争が鉄の時代と言えると思う。

この鉄の時代の前になにかがあるのか。そもそも、ボクやテレサが生きている間に戦争が終わるのかも分からない。

プロフェツ族の頂点であり、コヴナントの頂点でもある真実の預言者（The Prophet of Truth）が言った言葉通り、フォアランナーが全知全能で在ったとするのなら、何を望んでいたのだろうか？

そして、そのフォアランナーすらも追い詰めたフラッドという寄生生物。

ボクたちは本当に勝てるのか？

「そろそろ複数のブルートが目撃された場所につくわね」

「数を確認して、狙撃で少し減らすよ。中隊クラスならそこまで一旦退こう」

「そうね。小隊クラスならグラント（Grunts）、ジャツカル（Jackals）にブルートが2匹程でしょうし、やれそうね」
「うん」

ボクはフォアランナーとフラッドという脅威。そして、現状のコヴナントに関する思考を一時停止。

アクティブ・カモフラージュを起動し、岩陰から半身だけを出してSR99D-S2 オートマチック・スナイパーライフルのスコープを覗いた。

半壊状態の降下用ポッドが多数、大破しているファントム（Ph

antom)が2機、元々は中隊クラスの戦力を持っていた事が伺える。

恐らく、ニュー・モンバサにある遺跡へと向かう途中、宇宙空間でアールタス・ヴァダム様率いる重武装の航空母艦Shadow of Intentに迎撃されたのだろう。

降下用ポッドのほぼ全てが壊れているし、生き残っている兵の数も非常に少ないのがその証拠だ。

「グラントが12、ジャツカル2、ブルートが1だね。他にもグラントの遺体が20、ジャツカルの遺体が8、ブルートの遺体が5、これだけ確認できるからもう殆ど死に体だね」

「宇宙艦の撃ち漏らしね。数も少ないし、狙撃でブルートを殺つて残りも掃討しちゃいましょう」

「うん」

SRS99D-S2 オートマチック・スナイパーライフルの照準をリーダー格であるブルートに向ける。

手にはグラビティハンマー(Gravity Hammer)、ヘルメットは壊れてしまったのが被つてはいない。アーマーも所々破損しているところを見るにエネルギーシールドで防護はされていないみたいだ。

ボクは照準をブルートの頭部に合わせる。

そして、動きが止まった時に引き金を引いた。

ドンツと鈍い小さな音が聞え、決して軽くない衝撃が腕を襲う。放たれた弾丸はブルートのこめかみを貫通する。

さすがのブルートも頭部を弾丸が貫通すれば生きてはいない。ブルートはコヴナントに所属する種族の中で最も頑丈な頑強な肉体を持っている。ただその脳までもが筋肉で出来ている生物だ。

「キッキーね。ココからじゃ届かないから移動するわ。援護をお

願い」

「うん、わかった」

テレサは隠れていた岩陰から飛び出し、音と気配を消しながら敵に近づいて行く。

敵の方はリーダーであるブルートが即死した事で混乱していた。特に知能の低いグラントは武器を捨てて散り散りに逃げ始めている。それを何とかジャツカルがバラけないように指示を出している感じだ。

ボクは指示を出しているジャツカルの1匹に照準を合わせ、引き金を引く。ジャツカルと言えば、非常に華奢な体をしているが、それを補う程に優れた視力と聴力を有している。狙撃手としても偵察兵としてもコヴナントでは重宝されていた。

標的にしたジャツカルの頭が吹き飛んで行く。それほどまでにジャツカルの身体は弱いのだろう。

吹き飛ばされたジャツカルを見たグラントたちは、残ったもう一方のジャツカルの指示を無視して逃げ始めた。

そして、ある程度の距離まで近づいたテレサが持つBR55HBバトルライフルで一掃されて行った。

『ジャツカルが逃げたわ。そっちで狙撃できるかしら?』

テレサから通信が来た。どうも残ったジャツカルはその聴力でテレサの接近を察知。そして、グラントを囿にする形にして逃げ出したみたいだ。

『ボクがいるって分かってるはずなのにね。もう逃げる事しか頭がないみたい』

『そう、それなら一撃で送ってあげなさいよ?』

『うん、わかってる。これなら痛みを感じないよ』

必死に走って逃げるジャツカルの背に一度照準を合わせ、若干上に向ける。そして、予想される逃避先に照準を固定する。

走る速度と弾丸の速度を考えながら、引き金を引く。

スコープから見えるジャツカルの頭が綺麗に吹き飛んだ。どうやら上手く行ったみたいだ。

『ビューティフォー。さすがね』

『SRSS99D-S2 オートマチック・スナイパーライフルは粒子ビームライフル(Particle Beam Rifle)と使用方法がほとんど同じだからね。使い勝手が良いよね。それと、なんだかちよつと発音が独特?』

『歴戦の英雄、マクミラン大尉が言った名台詞の一つよ。後もう一つはステンバリーというのが在るわ』

『それって確か……。開発部の人が見つけて復元した昔のゲームの登場人物だよ?』

『あー、あー、聞えないわ。さつさと撤退するわよ』

テレサはそそくさと退却を始める。

こうなってしまうってはもう何を言っても意味はないだろう。まだ少しの時間だけしか一緒になっただけではないが、何となく彼女の性格は分かった。

戦争中なのに戦争ゲームやっちゃうくらいFPS好き。

常時愛用のBR55HB バトルライフルを手入れしたりしているし、ボクがお風呂に入るように言っても銃やアーマーの手入れを優先しちゃう。

24時間の内、半分くらいを作戦か訓練で費やし、腕っ節もそこらの海兵隊よりも強い。

その為、生まれて26年間一度も恋人とかは出来た事はないらしい。あと、処女っていうと半殺しにされるらしい。

作戦にも出ていないはずなのに重傷になって医療班に運ばれていた海兵隊の一人が言っていた。

「ほら、何してんの！ さっさと帰るわよ。他のエリートたちはもつとキビキビ動くじゃない」

「え？ あ、うん。ほら、ボクって元々ノンビリした性格だからね」

「……。ま、ソコが良いんだけどね」

「？ 何か言った？」

「なんでもないわよ。帰ったら久々に水浴びがしたいわ。確かホームの中に滝があったわよね？」

「珍しいね。確かにあそこならホーム内だし、遮蔽物だらけだから狙撃される心配もないね」

「男共が覗かない様に任せたわよ。ヴェル」

「うん、任せて」

戦争中とは思えない会話をしながら、ボクたちはホームキャンプへと戻った。

ホームキャンプまでの帰還は3日ぶりくらいなので、戻った時に海兵隊の皆々様からかわれて色々と恥かしい思いをする事になったけど……。

まあ、戦争中の一次の和みとしては良いよね。

ビギナー (Easy) (後書き)

設定ミスなどが在りましたら教えてください。

また、人類側が使用する武器の口径などが詳しく記載されていない為、ぼかした表現をして行きます。

ノーマル (Normal)

ホームキャンプに帰還したボクとテレサは、ニュー・モンバサに陣を構えるミランダ・キース中佐に通信で一通りの報告を行う。

といっても、ニュー・モンバサに向かっていたと思われるコヴナント兵が宇宙艦により撃墜され、一部生き残った兵が各所で身を潜めている可能性が在るとかそんな感じの報告だ。

報告が終わった後、ボクは海兵隊のみながいる場所に今回の情報を持って行き、テレサは銃の弾薬を補充する為に弾薬庫へと向かった。

「お、戻ってきたか。そっちはなんか収穫あったか？」

タコ部屋というに相応しい室内にボクが入ると、一人の兵士が話しかけてくる。ボクに話しかけてきたのは、国連宇宙軍海兵隊 (United Nations Space Command Marine) の一人ダリオ・ペラトナー二等軍曹。

元々はニュー・モンバサ市街に侵入してきたコヴナント討伐に当たっていたらしい。けど、その時に左腕を失ってしまった事からニュー・モンバサ郊外のここ……作業用工場周辺を警備することになったのだろう。

近くにあるサボハイウェイを通れば、ニュー・モンバサ市街へと繋がる道も見える。一番近いのはヴォイの街かな？

「宇宙艦に落とされたブルートの掃除をしたくらいだよ。たぶん、全コヴナントがニュー・モンバサにある遺跡に向かっているんじゃないかな？」

「ハッ、それならココが戦場に成るのも近いって事だな」
「マスターチーフのいない今、本当に勝てるんでしょうか？」
「幾らネモが味方についているとは言っても……」

ダリオ二等軍曹以外の海兵隊のみんなは怯える様な表情をしている。

ボクがココに配属された当初もボクを見て似たような顔をしていた。憎しみに満ちた表情でボクのことを見てくる海兵隊の人もいたけれど、そういう人は限って敵に特攻をかけて死んでいった。

いま残っているのはダリオ二等軍曹が率いている部隊の方々だけだ。

「しみつたれた事を言っただけじゃねえ！ 脳筋ゴリラ共にやられる俺らじゃねえだろ！」

「ボクも出来る限り頑張るから。みんなも頑張ろう。ね」

ダリオ二等軍曹に続いてボクも言う。

正直、気休め程度にもなりはしないだろう。全コヴナントがこの先に向かっているのだとすれば……相手の数は数百倍にも及ぶかもしれない。

このホームキャンプにいる戦力だったら、数分持つか持たないかきつと、ボクもテレサもみんなも生きては帰れないだろう。

ボクとテレサを含め30人ほどいるけれど、基本武装はBR55 HB バトルライフル (Battle Rifle) ではなくてM A5C ICWS アサルトライフル (Assault Rifle)。サブウェポンはM6G ピistol (Pistol) が全員に配られている。

あと、ブルートやグラントから奪ったコヴナントカービンが16丁、粒子ビームライフル (Particle Beam Rifle) が3丁、ブルートスパイカー (Brute Spike Rifle)

e)が13丁、燃料ロッドガン(Light Anti-Armor Weapon)が5丁だったと思う。

ここにはエネルギーを再チャージする為の充電器が配備されていない。だから完全な使い捨てになってしまう分、コヴナント側の兵器は温存される形になっている。

「M12 ワートホグ(Warthog)が3、M12G1 ガウス・ワートホグ(Gauss Warthog)が1、M808B スコーピオン(Scorpion MBT)が1、ネモが奪ってきた対空レイス(Anti Aircraft Artillery Wrath)が1と……。ま、戦力は結構あらあ。脱出用のD77H-TCI ペリカン(Pelican)がねえから逃げられないが……。援軍が来るまで踏ん張る余力はあらあな！」

ダリオ二等軍曹は渋みのある顔に微笑みを貼り付けて言う。この人の周りを惹きつけるカリスマ性が在ったからこそ、部隊は生き残れてきたのだろう。

そういえば、あまり関係ないけれど……。ボクが奪ってきた対空レイス。これは、人類のカテゴリに入れるのならば対空戦車、自走対空砲に入るハズだ。だけど、ボクは前から考えていた事がある。左右に付けられたロッドガン連射口は対空というよりも拠点制圧に向いていると思う。

ロッドガンの弾速は決して早くない。レイスに装備されている大型プラズマキャノンに比べれば速いのだけど、それでもスコーピオンに装備されている主砲に比べると遥かに遅い。

しかし、その反面異常な程の連射性を誇り、狭いところにいたらまず避ける事は出来ないだろう。

ロッドガンは着弾すると同時にエネルギー爆発を起こす特性を有しているし……。なんで連発式の燃料ロッドガンを対空としているのか、永遠の謎だと思う。

「そ、そうだよな……。それにネモがいればスパルタンほどではないにしても心強い」

その場にいた海兵隊のみんながボクを見て安堵の微笑みを浮かべる。ボクは笑みという表情を作る事が出来ないから、みんなに向かつて力強く頷く事で返した。

その後、みんなと他愛のない会話をしていると、タコ部屋の扉が開き一人の兵士が中に入ってくる。

「お、ネモここにいたのか。お姫様がご機嫌斜めでお前を探してたぞ」

その人の言葉でボクは重要な約束を思い出した。

。

「なんでもないわよ。帰ったら久々に水浴びがしたいわ。確かホームの中に滝があったわよね？」

「珍しいね。確かにあそこならホーム内だし、遮蔽物だらけだから狙撃される心配もないね」

「男共が覗かない様に任せたわよ。ヴェル」

「うん、任せて」

。

。

テレサは約束を破られるのを最も嫌う。ボコボコに殴られても文句は言えない。

「ネモは会議に出てくれてるって事にしといてやったからよ。さっさと行けって」

「あ、ありがとう!」

ボクはお礼を言っただけで、すぐにテレサの元へと向かった。

海兵隊

タコ部屋に集合していた海兵隊員は、急いでODSTの生き残りであるテレサ少尉の元へと向かうネモを見守った。

「青春って良いよなあ」

「ああ、そうだな」

「俺らが青春を謳歌した時代なんかあったか？」

「いや、ねえな」

「戦い詰めでこいつが恋人だしなあ。ハハハハハ」

一人の兵士が丁寧に拭いていたアサルトライフルを掲げる。

それと同時に他の海兵隊員も「ちがいない」と言いながら笑いあった。

「しっかしまあ、エリート族と人間で子供なんて生まれるのか？」

「いや、わからねえな……」

「あー、なんていったか？ シップマスターのオールなんたらも言っただろ？ 前例がないってな」

「そりゃま、いままで戦争してた相手だから……。しかもアレだろ？ エリート兵つてのは戦士としての在り方を重んじるらしいからなあ。陵辱とかは一切ないらしいぜ。ブルートは犯ってそうがよ。

その場合は死んじまうだろ」

「脳筋ゴリラにやそんな知恵すらありやしねえよ」

女性海兵隊員に聞かれたらタコ殴りにされそうな話題で盛り上がり始める男性海兵隊員。

その顔には、先ほどまで見えていた恐怖と怯えすらない。

ただただ一人のエリート族と同期の女性海兵隊員を話題の肴として盛り上がるオヤジどもの集団と化していた。

「ほんと、アイツらだけは生き残らせなきゃな」

「おうよ。ソレくらい出来なきゃ海兵隊の名折りだぜ」

「最悪の場合は、あの二人だけ乗っけてペリカン飛ばせばいい」

「お、修理できたのか？」

「完全じゃないけどな。操縦者に二人だけなら少しの距離くらい飛べるだろうよ」

「そうか、それじゃあ最悪の時はあの二人だけでもな」

卑猥な話で盛り上がっていたオヤジどもの表情は、歴戦の戦士のソレへと変わり全員一致での誓いを立てる。

なんとしても未来の希望となりえる二人を守らなければと……。

「運良く生き残ったら、アイツらの子供におじちゃんって呼んでもらうのが夢だな」

「俺も！ 俺も！」

「おめえ、ソコはアレだよ。プレゼント持って言ってパパって呼んで貰うのが上等だろうよ」

「クリスマスにやサンタの格好しなきゃいけねえな」

が結局は、ものの数秒でオヤジの顔に戻り会話を続ける海兵隊員であった。

ノーマル (Normal) (後書き)

グレイヴマインド (Gravemind) という名は、作中でマスターチーフ、アービター、コルタナ以外は口にしていな思っ
たので出さない事にしました。

HaioシリーズのSS増えないかな……。

アドバンス（Heroic）

ホームキャンプから凡そ1300mほど離れた場所に岩場がある。その場所には、3人の男性海兵隊員がノンビリとしながら待機していた。

「あと、6時間で見張り交代ツスね」

比較的若い海兵隊員がSRSS99D-S2 AM スナイパーライフルのスコープを覗きながら言う。

他の二人はMA5C アサルトライフルの手入れをしている。

MA5C アサルトライフルを手入れするうちの一人、髭面が欠伸をしながら言った。

「まだ、6時間も在るんじゃねえか。敵も着やしねえ場所で、延々と荒らされた大地を見続けるこっちの身になって欲しいもんだ」

髭面の横でMA5C アサルトライフルを磨いている迷彩色のコートを身に纏い、周りの景色と一体化している小男も口を開いた。

「……ネモとテレサ少尉の関係性が……気になる」

「お、それは俺も気になるな」

「俺も気になるツスよ。ていうか、ネモが羨ましいツスよ」

スコープを覗き込んでいた海兵隊員も二人の方を向き、雑談に加わる。

そして、三人は警戒任務の最中にも関わらずお喋りを始めた。

「そついやよ。ニュー・モンバサにある遺跡だっけか？　そこにコヴナントどもは向かってるんだよな？」

「そうらしいツスね。アルファ・ヘイローはジョンソン上級曹長が言うには壊れたらしいツスけど……まだ他にもあるって事ツスよ」

「……もたらされている情報だけでは、判断できない。だが、ニュー・モンバサで見つかった遺跡がヘイローに関する何かなのは確か」
「結構歳だけは食ってるつもりだったけどよお。ニュー・モンバサに遺跡があるなんざ……。まったく、これぼっちも知らなかったぜ」

髭面の海兵隊員は顎鬚を撫でながら頷く。

そして、手に持ったM A 5 C　アサルトライフルを肩に担ぎながら立ち上がった。

「ま、なんにしても」

その直後、紫の光が髭面の海兵隊員の頭を貫いた。

撃ち貫かれた本人も理解できなかったのだろう。「あ……」と小さな呻き声を漏らし、レーザーに焼かれた空洞からは血や脳漿が垂れ出す事はない。

「！？」

「なっ！？」

その光景を目の当たりにした二人は瞬時に身を低くし、岩陰に身体を隠す。

先ほどまで呆けていた顔は引き締まり、緊張感に溢れている。

「頭部側面を打ち抜かれてるツス。敵は正面ツスか……」

「……通信完了。撤退する」

「了か　　ぐうつううう!?!」

移動を試みた若い海兵隊員の左腕に紫色に輝くクリスタルの針が突き刺さった。

叫ぶまいとし、奥歯が砕けそうな程の力で右裾を噛み締める。

そして、左腕に刺さった針を抜こうとするも、若い海兵隊員の腕は小柄な海兵隊員の手に掴まれて止まった。

「まで……触るな。爆発するぞ」

「ッ……くうう……」

若い海兵隊員は自身の左肩を押さえつけ、小さな呻き声を漏らし悲痛な表情をする。

ソレを一瞬だけ見た小柄な海兵隊員は、ゆっくりと慎重に紫色に輝くクリスタルを引き抜いていった。

「ぐうう……」

「……これは、ニードラー（Needler）。敵がちか」

ピシユンという独特な音が響き、小柄な海兵隊員の頭が紫の光によって消し飛ばされる。

頭を失った身体は、首から信じられない量の血を噴出し、ゆらゆらと揺れた後、あっけなくその場に倒れた。

隠れていた岩場は真赤に染まり、生き残った海兵隊員の居場所を精確に敵に教える。

「くう……。し、司令部！　司令部、応答願います」

『……ちら、……01。何が……た?』

「スナイパーとニードラーを装備したコヴナント兵がそちらに向かっています。警戒部隊は全滅。自分ももう長くありません。急いで

「バリケードを！」

『……した！？ 応答……ろ！ ……隊！ 応……』

生き残った海兵隊員はホームキャンプへの通信を繋ぎ、自らの前に立ちはだかったグラビティハンマーを持つブルートに向けてSR S99D-S2 AM スナイパーライフルを向けた。

「ハッ！ タダで殺られてやる海兵隊員なんていねえツスよ！」

そう叫び、生き残った若い海兵隊員は使えなくなった左腕を無理やり動かし、撃ち出せる一発に全てを賭けてトリガーを弾いた。

ネモ・ヌルヴェ(Nemo Nullive)

ボクがテレサに胸部を叩かれ、脛辺りを蹴られていた時、ホームキャンプに五月蠅いほどの警報が鳴り響いた。

それに続く様にオペレーターの慌てる様な声が響く。

『各員に告ぐ。05ポイントの警戒部隊が全滅。コヴナントが本基地に向かっている事を最後通信で確認した。全員警戒を強化。休んでいる者も含め、戦える者は全員、邀撃体勢を取られたし！ 繰り返す。05ポイントの警戒部隊が』

ボクは上を向き、ただその報告を聞いていた。テレサもボクを叩くのをやめて報告を聞いている。

周りからは走る音と海兵隊員の声が聞える。

男性の声、女性の声……。全員叫んでいる。銃器を運び出すガシ

ヤガシャという金属の擦れ合う音。

ここまで激しい音を聞くのは久しぶりだ。

「ヴェル、行くわよ」

テレサはボクを見上げて言う。

その瞳には強い意志が込められていた。

それは、映像でしか見たことのないスパルタンの瞳に宿っていた
ものと同じ……。

「うん」

テレサに頷き、ボクは歩き出す。

行く場所は戦場。

ボクたち種族の特徴なのかもしれないが、基本的に逸る気持ちと
いう物はない。海兵隊員の人たちに色々と聞いてみても理解する事
は出来なかった。

ボクたちは皆、上にいる者に従う。それは隷属じゃない。エリー
ト族、としての誇りだからだ。

人類流に言うのなら、騎士道精神というのと同じだと思っ。

ボクたちはその精神に従い行動して来た。皮肉にもその精神が在
ったからこそプロフェツ族に騙され続けたと言えなくもないけれ
ど……。

「私は第二武器庫へ向かうわ」

「ボクは先に行ってるね」

「警戒は怠っちゃダメよ？ 良いわね」

そういうと、テレサは走ってコヴナントの武器が保管された武器
庫へと向かって行った。

ボクはボクで自分の信じる生き方に従う為に武器を手にとって先に海兵隊員の元へと向かう。

手にはSR S99D-S2 AM スナイパーライフル、背中にBR55バトルライフを装備。腰には又とウズゼから貰ったエナジーソードを二つ。

エナジーソードのバッテリーは最大だからそう簡単に使い切る事はないと思う。

アクティブ・カムフラージュと組み合わせれば、大半のブルートたちは一撃で仕留められるだろう。アクティブ・カムフラージュを見切る程の脳があるとも思えないし……。

「お、来たか」

「敵の数はわからねえが……こつちの数倍はいるって所だろうよ。

正面玄関から高濃度のプラズマが検出された。粒子ビームライフルで穴が開くとも思ってたんのかは知らねえが、相手のスナイパーの数は予想以上だろうな。あと警戒部隊からの通信で敵にはブルートリーダーが3〜4匹はいると見るべきだろう。最悪のシナリオだぜまったく」

ダリオ二等軍曹の横で状況を説明してくれたのは、アーマン伍長だ。東地区の警戒を担当していたハズだけど……緊急事態という事で戻されたのだろう。

アーマン伍長は元々が傭兵上がりだったとかで、エリートの子にも最初から普通に接してくれた。

「ボクが前線に」

「いや、お前は後ろで援護射撃だ。この基地に配属されてるエリート族はネモだけだからな。ネモが殺られちゃったら勝ち目が無くなる。海兵隊員が前衛だ。いいな？」

ボクの言葉を遮ったのはダリオ二等軍曹だった。

「どうやらボクは後衛らしい。丈夫さで言うのなら、ボクの方が在るかに丈夫だし、海兵隊員はエネルギーシールドで防護されていない。」

ブルートに殴られたただけだって絶命しかねない。頭じゃなくても一撃で死んでしまう可能性だってあるのに……。

「でも……」

「でもじゃねえ。これは戦争なんだ。勝つためだ！ いいな？ あと、テレサ少尉と一部女性海兵隊員も後衛だ。ま、ODSTのボディアースーツは俺たちには合わなかったんだよ。俺たちがやらねえよう頼むぜ。あと、M12 ワートホグとM808B スコーピオンは俺たちが使う。後衛はM12G1 ガウス・ワートホグを使ってくれ。対空レイスは今作戦じゃ使い道がねえ」

ダリオ二等軍曹はそう言うと、MA5C ICWS アサルトライフルを担いで行ってしまった。

その背中を見ていると、アーマン伍長が苦笑を漏らしながらボクに言う。

「まあ、察してやれ。時間も無いしな」

そう言ったアーマン伍長もMA5C ICWS アサルトライフルを担ぎ行ってしまった。

「……」

ボクは二人の背と防衛前線に行く海兵隊員の背中を見送る。やれる事をやらなければ行けない。

ボクは誇り高いエリート族の兵なのだから……。

「ヴェル、行くの？」

いつの間にかボクの後ろには数名の女性海兵隊員を率いたテレサが立っていた。

少し悲しげな瞳をボクに向ける。

こうして見てみると、テレサはかなり小さい。ボクが大きいだけなのかもしれないけど……。

「うん、行つて来るよ。ここでエネルギーシールドで防護されてるのはボクだけだしね」

「絶対に帰ってきてね。あと、敵を後ろに通さないでね？」

「もちろんだよ」

ボクはテレサに頷き、手に持っているSR S 9 9 D - S 2 A M
スナイパーライフルを渡し、テレサからBR 5 5 バトルライフルを受け取り前線に向かう。

「ダリオ二等軍曹。ボクも前に出ます」

「ああん？ 後衛だつて言つただらうが？」

「もう引き返してる時間もないです。だから、ボクはここで戦います。後ろにはテレサもいますしね」

ダリオ二等軍曹はボクに何か言おうとしたけど、結局何も言わずにM A 5 C I C W S アサルトライフルを構えて正面を見る。

報告から約1時間ほど経過しています。そろそろ警戒部隊を襲ったコヴナント兵がこちらに到着していてもおかしくはない。強行突破を好むブルートならば、乗り物が在れば突っ込んでくるに違いないと思っけど……。

今の所、強行突破してくる気配はない。ということは、乗り物は

持っていないのだろう。

たぶん、ボクとテレサで倒した落とされた生き残りが集まって二ユー・モンバサの遺跡に向かっていているのだと思う。その途中、どうせだから敵拠点のひとつを落とそうと考えたのかな？ でも、ブルートだからそこまで考えないで突っ込んでるだけかもしれないけど……。

「そろそろ、コヴナントがこっちに到着してもおかしくねえ。数からしてグラント自爆部隊はいないだろう。突っ込まずに冷静に1匹づつ撃ち殺せ！ ゴースト（Ghost）もレイス（Wrath）も確認されちゃいねえ！ 近づかせなきゃ勝てる！ いいな！」

みんなの士気をあげる為、ダリオ二等軍曹が叫んでいる。

確かにこちらの方が有利なんだ。コヴナント兵は遮蔽物のない岩場からこちらに侵攻しなければ行けないけど、ボクたちは遮蔽物のある場所から攻撃する事が出来る。ボクたち前衛の後ろにいる狙撃部隊である後衛も準備が完了しているし、近寄せなければ……。

「ダリオ二等軍曹！ 偵察部隊がこちらに侵攻してきているコヴナント兵を確認！ その数80程との事です。全員少なからず手傷を負っており、宇宙艦に撃墜された者の生き残りかと思われるとの報告を受けました」

「よし！ 聞いたか！ 敵は瀕死だ。だが、瀕死の敵ほど何をしてくるかわったもんじゃない……相手が脳筋だつて事を忘れんじやねえぞ！ よおーく狙って頭だけをぶち抜いてやれ！ アーマーの損害が激しくないヤツはエネルギーシールドで防護されてる可能性があるある！ とりあえず、シールド剥がす為に撃ちまくれ！ そうすりゃ、ネモが倒してくれる！ いいな！」

海兵隊員の男女入り混じった声が響く。場所が場所だけにコヴナ

ント兵に聞える事はないと思うけれど、凄い音量だ。
ボクもみんなに負けなくらいの戦いをしなきゃいけない。

「ホームキャンプから200m以上離れるなよ？ あくまでも拠点
防衛だ。その事を脳みそに叩き込んで！ 俺が率いる部隊は右、
アーマン伍長が率いる部隊は左だ！ ネモ、お前が中央部隊を指揮
しろ！ エネルギースールドで防護されたブルートは間違いなく正
面から突っ込んでくるだろう。俺の勘が正しけりゃあ、左右から来
るのはジャツカルとグラントの群れだろうな……。M12 ワート
ホグは俺とアーマン伍長の方で使う。M808B スコーピオンは
中央だが突破されないよう壁の役目が在る事を忘れるな！ あとは、
主砲を誤射するんじゃないやねえぞ！」

ダリオ二等軍曹は全員に言つとM12 ワートホグの助手席に乗
り込んだ。

そして、他の全員も素早く命令された位置へと向かう。
ボクの元にも6人の海兵隊員がやって来た。

「俺の名はジヨナサン。んで、コイツは相棒のアーチャー」

その内の二人がボクの正面に立って言う。

大体30代後半くらいの男性が二人、ジヨナサンはMA5C I
CWS アサルトライフルを手に持ち、アーチャーはボクと同じで
BR55 バトルライフルを持っていた。

その二人に続くように名前を紹介する残りの4人。

40代後半男性のゼフラム、30代前半の女性コクレイン、20
代後半のアニカ、50代前半男性のハンセン……彼ら6人がボクが
指揮するチームの仲間らしい。

「顎なしがリーダーか……。お前らが優秀なのはイヤって程に知っ

てる。期待している」

顔に深い傷を負っているハンセンがボクに向かって言った。

そして、岩陰にしゃがみ、上半身を少し出した状態でBR55
バトルライフルを構える。

とりあえずはボクの言う事を聞いてくれるみたいだ。

あまり時間もないし、手早く位置についてもらおう。

「M808B スコーピオンの操縦と銃座の担当は？」

「私がM808B スコーピオンの操縦を担当します。ガンナーは
ゼフラムです」

一歩前に出たのは、6人の中で最も若いアニカ。その後ろには名
を言われたゼフラムが控えていた。

「それじゃあ、二人にはM808B スコーピオンをお願いするよ。
移動は出来るだけ控えて、場所が狭いからね」

「了解しました！」

アニカは敬礼しながら言いM808B スコーピオンに乗り込む。
ゼフラムも同様に敬礼しM808B スコーピオンに乗り込んだ。
残りのジヨナサン、アーチャー、コクレーンはボクを見ている。

「残りの3人はボクと一緒に行動。少し前に出て敵を邀撃するよ。

ハンセンはその場から届く範囲で援護射撃をお願い。敵がM808

B スコーピオンに取り付こうとしたら速やかに排除」

「了解！」

ジヨナサン、アーチャー、コクレーンが敬礼しながら言う。ハン
センだけは敵が来るであろう方向を向いたまま「……了解」と小さ

く口にした。

敵が近くまで来ている。後退、撤退、退却という選択肢は用意されてない。

ここで退けば大切な人が死んでしまう。そして、ここで退けばニユー・モンバサにある遺跡が起動して知的生命体すべてが排除される可能性だつてある。

少しでも偽りの預言者どもが遺跡に辿り着ける可能性を減らさなきゃいけない。

「……。祖先の名にかけて、子孫の名にかけて、この戦いに勝利をもたらす事を誓う！」

ボクは咆哮と共にそう言つて邀撃する為の場所へと向かった。

ついて来てくれている3人はなぜか笑みを浮べている。ハンセンもM808B スコーピオンの銃座から上半身を出している。ゼフラムも笑みを浮べている。たぶん、M808B スコーピオンの中にいるアニカも笑みを浮べているのだろう。

「ここは主戦場じゃあない。辺境も良い所だ。……だが、ここで負けたと在つては海兵隊の名折れ！ 隊長の誓いに答える為にも勝ちましょう！」

そう言つてくれたのは、紅いショルダアーマーを付けているアーチャーだった。

他のみなもその言葉に同意するように頷く。ボクもみんなに答える為に頷いた。

これ以上の言葉は必要ないだろう。エリート族としての誓いも起てた。

ならば、目指すは戦場。勝利をもたらす為に！

アドバンス (Heroic) (後書き)

Haio4が楽しみです。

ちなみに、私はスタートレックが大好きだったりします。

レジェンド (Legendary)

敵の数は報告以上だった。

でも、ダリオ二等軍曹の予想は正しくて左右からはグラントとジャツカルが攻めてきているみたいだ。

中央からはブルートモラー (Brute Mauler) とブルートショット (Brute Shot) を持った3体のブルートとグラビティハンマーを持った1体のブルート・チーフテンを中心に数匹のジャツカルとグラंकが迫って来ている。

スコープイオンの主砲で一部消し飛んだと言っても……。エネルギーシールドで防護されたブルートが前に出るからは主砲も効果が薄くなってきている。

エネルギーシールドが剥がれそうになるとグラントとジャツカルを壁にする事でエネルギーシールドが剥がれるのを防いでる。これだからブルートはイヤなんだ。

「ひでえなあ……。味方とも思ってたねえのか？」

ボクの隣でブルートを撃っているジヨナサンがボソリと呟く。アーチャーも口には出さなかったけどグラントとジャツカルに不憫そうな視線を送っていた。

ブルートは他の種族に恐怖を与える事で戦闘を強制する種族だ。グラントとジャツカル、この二つの種族は力ではブルートに勝てないし、ジャツカルに至っては雄個体であるスカーミシャが絶滅してしまっている以上、守ってくれる存在はいない。

「敵戦力が減っているから問題ないわ。ただ……グラントとジャツ

カルがブルートの恐怖によって束縛されているなら恐慌状態になって自爆部隊化しなければ良いのだけど……」

コクレーンは冷静に戦況を見ていた。ボクもソレは考えていたけど、多分ないだろう。

「たぶん大丈夫だよ。プラズマグレネード（Plasma Grenade）の数は多くないだろうし、宇宙艦に撃墜されたコヴナントの寄せ集めだから、手榴弾系はあまり所持してないと思う。でも、警戒は怠らないでね」

ボクはそう言いながら、グラビティハンマーを持ったブルート・チーフテンが近寄って来れないように狙い続ける。さすがのブルートもバトルライフルとスコープオンの機関銃で撃たれ続けては堪らないらしく、回避行動を優先しているのか進みは遅い。

グラントとジャツカルも出来るだけブルートの盾にされないように手の届く範囲から離れ始めてる。

地の利はこちらにある。

でも、問題が一つだけあった。弾薬の数だ。

ここは確かにニュー・モンバサに行こうと思えば行ける位置に在るし、問題となっっている遺跡にも行ける距離にある。

だけど、あくまでもこの拠点を維持するというのが任務にある為、滅多な事がない限り移動は許可されてはいない。

全軍を一箇所に集中させれば良いという物でもないのだろう。

それに、ボクたちがここに留まる理由はもう一つある。

生き残っている民間人の保護及びシエルターへの誘導を行う為……。様々な場所へと繋がる道路が集中している一箇所でもあることは、生き残った民間人が立ち寄る可能性があるんだ。

全コヴナントが遺跡に目を取られている為、偶然生き残った人々が元々軍事基地として機能していたここを訪れる可能性は否定でき

ない。

現にボクがこの基地に入ってから、2人ほど民間人を発見する事が出来た。

ボロボロで今にも死んでしまいそうだったけど、何とか持ち直していまは地下シェルターで生活しているハズだ。

この基地を明け渡すという事は、そういった民間人の命を奪う事にもなってしまうから……。

「アニカ、主砲はあと何回撃てる？」

『あと、5回です。ゼフラムの機関銃も400発ほどしか残っていません』

「ボクが許可するまで待機。ジヨナサン、アーチャー、コクレーンは大丈夫？」

「弾倉なら手持ちで6だな。手榴弾は持ち合わせてねえ」
「同じく」

「ファイアグレネード（Brute Firebomb）とスパイクグレネード（Spike Grenade）を2つづつ持つてるわ」

ボクは全員から弾の残量を聞いて考えた。

このままじゃジリ貧だ。皆のエイミング能力はかなり高い。かなり高いはずなのだけど、エネルギーシールドで防護されているブルートにはさしたるダメージを与えてはいない。

ただ、グラントとジャツカルの数に確実に減ってきている。

ブルートが4体存命している以上、ボクが突っ込んでも2〜3体しか倒せないだろう。4体目がブルート・チーフテンじゃなければ何とか倒せたかも知れないけど……。

「みんな、ブルート・チーフテンの左右に展開してるブルートを集中的に狙うよ。ただ弾数を制限してグラントとジャツカルがいる方

に回避させ続けて、ブルートがグラントとジャツカルに接触して回避が疎かになつたら、スコープイオンの主砲で吹き飛ばすよ。エネルギーシールドでも主砲が直撃すれば一撃だからね」
「了解」

ボクに指示にしたがつて、みんなが左右のブルートを狙う。ジョナサンとアーチャーが右側をコクレーンとハンセンが左側を……ボクは両方の調整を行った。

アニカとゼフラムは左右の敵を見て攻撃のタイミングを伺っているのだらう。主砲をいつでも撃てるような状態にして右側より調整していた。

「コレなら平気そう」

ボクがそういった直後にスコープイオンの砲撃音が響く。続け様に2発。

正面から侵攻してきたコヴナントの左右に大穴が空き、そこにいたブルートは直撃を喰らった為か上半身が無くなっている。

「よっしゃー！ あとは、ブルート2匹とザコだけだ」

「ジョナサン、まだ敵が残っている時にはしゃぐものじゃないわよ」

ジョナサンが喜びを露にし、それをコクレーンが注意していたのだけどその表情もどこか明るかった。

アーチャーは相変わらず他のコヴナントを撃ち続けている。ハンセンは後ろにいるから表情は分からないけど発砲音は聞えるのでアーチャーと同じで撃ち続けているのだらう。

「敵との距離は40m程、ブルートなら走って接近してきそうな距離ね」

「周りのグラントとジャツカルの数は、残り30ちょ

」
ジヨナサンが敵の数を言おうとした時、その頭部に鋭い棘の様な物が突き刺さり、頭を首から根こそぎもぎ取って行った。

戦場で何回か見た光景。見た事のある弾……極太の針を射出するマシンガン、ブルートスパイクライフル（Brute Spike Rifle）の弾だ。

どうやら、ブルート・チーフテンは腰の装甲内側にブルートスパイクライフル 通称：スパイカー を忍ばせていたらしい。

「スパイカーを隠してたなんて……」

ボクは頭を失ったジヨナサンを隣に寝かせ、ブルート・チーフテンに向かって撃ち続ける。コクレインとハンセンも仲間の死に見慣れているのか、驚いたような雰囲気はなく冷静にジヨナサンが担当していた場所の穴埋めを行っていた。

ただアーチャーだけが膝を突き呆然としている。

無理もないだろう。最初に在った時から感じていた……。二人は無二の親友なんだろう。

「……」

でも、いまはアーチャーに声を掛けてあげられる程の余裕はボクにはない。

一人減った事でグラントとジャツカルが自らの被害を減らす為に好戦的になってきてる。

あんまり時間を掛けると良くないかも知れない。今回倒せたとしても次回また来る可能性が在るし、ここでの消費は出来るだけ抑えたかったけど……。

「みんなグラントとジャツカルをお願い。ボクは残ったブルートを殺るよ」

ボクはみんなにそう言っつて、エナジーソードを両手に持って前に出る。

今回は勝てるだろう。恐怖に縛られているグラントとジャツカルならばものの数には入らないけど……。弾が減ってしまった以上、次に似たようなことが起こったら……。最後になってしまいかもしいない。

「！」

ボクはアクティブ・カモフラージュを使わずに前に出ているブルートにエナジーソードを突き立てる。そして、息の根が止まる前にバトルライフルで頭を粉砕した。

ボクたちエリート族がエナジーソードでトドメを刺す時は相手を強いと認めた時だけだ。こんな低脳なんかに名誉の死を当てる必要はない。

「ウゴオー！」

ブルート・チーフテンがグラビティハンマーを振りかざしてボクに迫ってくる。

凄く遅い。どうしようもないくらい遅い。

この脳なし……。いや、少なくとも前リーダーのタルタロスは頭が良かったのだろう。ボクたちエリート族を失墜させる程の暗躍をして見せたのだから……。

でも、いま目の前にいるブルート・チーフテンはどうだろう？

猪突猛進に突っ込み、その突進によりグラントとジャツカルが誤射を恐れて撃ってこない。

「叩き潰シテヤル！」

何も考えていないのかな？ それともボクを叩き潰す事しか頭にないんだろつか？ 動きが単純で読みやすい。

ボクはグラビティハンマーを一步退いて回避し、エナジーソードで斬りかかる。

エナジーソードがブルート・チーフテンを防護するエネルギーシールドを切り裂いた。でも、ブルート・チーフテンはソレで怒りが最大値になったのかボクに向かって突進してきた？

凄く無謀だと思う。ボクは簡単に回避し、ブルート・チーフテンの後ろに回りこみエナジーソードを背中から突き刺した。

ボクたちに比べてブルートは確かに重い。でも、ボクたちエリート族の腕力をもってすれば持ち上げる事はできる。

「グウガアア……」

突き刺さったエナジーソードを引き抜くと同時にバトルライフルで後頭部を滅多撃ちにした。

それでも絶命まで少し時間が掛かる。コヴナントの中で最も頑丈な肉体を持つだけの事はあるのだと思う。

苦しむのが長くなるだけに過ぎないけれど……。

『狙撃部隊から報告が在りました。左右に展開していたコヴナントが撤退を始めたそうです。おそらく中央のブルートが全滅した為ではないでしょうか』

その通信が届いた直後、ブルートの死を確認した中央のグラントとジャッカルは散り散りになって逃げ始めた。この地球はコヴナントにとっては敵地に他ならない。逃げ回ったとしても助かる確率は

低いと思う。

弾数に余裕が在れば残らず始末したいところなのだけど……ボクはみんなの方を向いて指示をする。

「逃げる敵は無視して……そこまで弾に余裕はないからね。撤退を確認したら落ちてる武器を回収しちやお ツウ」

脇腹が痛い。削り取られたようなこの痛み……ボクはよく知っている。

エネルギーシールドの防護を突破したブルートモーターから射出された散弾の痛み。戦場で何度も味わった事が在るから覚えてる。

「ネモ？」

痛いけれど耐えられない痛みじゃない。

コクレーンに傷を見られない様に身体の向きを変えなきゃ……。

「ん？ どうしたの。逃げてる敵が無造作に銃を乱射してるみたいだから気をつけてね。さつき、エネルギーシールドに1発当たったから」

「了解しました。それにしても、そのエネルギーシールドは便利そうですね」

「そうかな？ アーマーが300〜500kgくらいの重量だけど…

…着てみる？」

「……遠慮しておきます」

コクレーンはボクのアーマーを見ながら呆れたような表情をする。そりゃあ、ボクたちエリート族は人よりも筋力面などで優れてるけど……。

「一応言っておくけど、スパルタンが装備してるアーマーも同じくらい重さだよ?」

「……彼らは、なんとというか例外ですからね。確か強化を施されていると伺いましたし」

「うん、ボクもそう聞いているよ。まあ、ボクたちエリート族は身長や筋肉の付き方、骨格にしても人類とは別物だからね」

ボクに少しの間、コクレーンと他愛もない会話を行ってから与えられた部屋へと戻る。

人間に限り無く近い生活様式を持つものの、若干ながら色々と異なっている部分がある。それにより摩擦が発生しないようにキース中佐が小さいながらも個室を用意してくれている。おそらく他の同胞も同じ様な扱いなのだと思う。

「はあ……他のみんなはどうしてるのかな?」

何となく口から漏れてしまった。

稀に通信で話すけれど、エリート族は様々な基地に数名が派遣され、他は遺跡の調査からフラッドの掃討など様々な事を行っている。ボクの他にも何百人かの同胞が人間と一緒に戦っているハズだ。もしかしたら、ボクとテレサの様な関係になった者もいるかもしれない。

……。

まあ、いまは治療をしなきゃ……。ほんの少しだけ散弾がエネルギーシールドを突破してきたのかな?

外傷は殆どないし、もう痛みも引いてる。

でもとりあず、治療効果のある湿布を貼ってと……。こんな感じかな? ちょっとひんやりして気持ちいかもしれない。

故郷にはこういうモノは無かったから少し新鮮だ。

人間の作る物ってボクたちエリート族が作ってきたものに似てい

る物も在るけれど、全く違うモノもある。

戦いが終わって平和になったら、きっとボクはこの地球に残るの
だろう。平和になってノンビリする前に色々と覚えておかなきゃ…
…。

ラスト・リゾート (Last Resort)

戦いの終わりは呆気ないモノだった。

結局、ボクたちのいた場所はあの後何十回も襲撃を受けたもののその度にコヴナントの兵器を拾い集めて何とか乗り切った。

攻めてきたコヴナント兵の殆どが重傷を負っていたのが幸いしての勝利だったと今でも思う。

でもまさか、あの最悪が降りかかってくるなんて思いもしなかった。

その最悪の名は、フラッド……。

知的生命体に寄生することで増殖、成長する、非常に感染力のある寄生性の生命体。遙か昔、多くの生命体を絶滅に追い遣り、フォアランナーが自らと引き換えに封印した生命体。

まさかソレと地球上で戦うことになるなんて……。

「う、うわー！！ 撃て！ 撃て！ 近寄らせるな！」

「こ、こっちに来るなー！」

阿鼻叫喚とはこの事を言うのだろう。

ボクにはテレサを抱きかかえて逃げる事しか出来ない。

「ヴェル、どうなってるの！？ これは一体何ー！！」

「……フラッド。名前は聞いた事あるよね。でもなんでココに」

エネルギーシールドで防護されていない海兵隊員じゃフラッドには対抗できない。ボクだって防護が切れたら寄生されてしまうだろう。

それほどまでにフラッドの感染能力は高いんだ。

「は、入ってくるなー！ 俺の中に入ってこないでくれー！」

「ぎゃあああああー？」

「やめて、やめて、やめてえー！ きゃあああああー！」

「食べないで！ 食べないでよ！ 私を食べないでよー！」

耳を覆いたくなる程の悲鳴が基地のそこらじゅうから聞えてくる。テレサは耳を覆いながらボクに抱きかかえられている。なんとしてもテレサだけでも無事にココから……。

「ヴウオオオー」

フラッドに寄生された海兵隊員がボクの目の前を塞ぐ。驚異的なフラッドだけとその耐久力は非常に低く、殴るだけでも一応倒す事は出来る。あくまでも一応に過ぎないけれど……。奴等は壊れた身体すらも再生させて生きている生命に襲い掛かってくる。

「ネモ！ こつちだ」

ボクを呼んだのはダリオ二等軍曹だった。ボクはダリオ二等軍曹がいる部屋に入るとダリオ二等軍曹が急いで扉を閉める。

テレサを降ろした時、ダリオ二等軍曹が話しかけてきた。

「二人は無事だったか……」

「はい、他の人たちは？」

「ダメだ。俺が知ってる中で生き残ってるのはお前たち二人だけ……。この先にワートホグが一台ある。それで脱出するんだ」

「ですが、ダリオ二等軍曹は……」

「テレサ少尉、あんたにや未来がある。いいからネモと逃げるんだ。どうせここは助からねえ」

「ですが!？」

「テレサ……」

ボクはテレサの肩に手をおいて首を振る。

テレサは何処か納得できないというような表情をしていたけれど……。

「ダリオ二等軍曹、ご武運を」

「おう、お前もなネモ。生きるよ」

「はい。……行こう。テレサ」

ダリオ二等軍曹に敬礼をし、テレサの手を掴んでワートホグが在る場所へと走る。

テレサは走りながらダリオ二等軍曹に向かって敬礼をしていた。

その瞳からは涙が零れ落ちている様にも見えただけ、ボクはこの時、なんと言っただけならばいいからなかつた。

だから、ただ生き残る手段だけを考えていた。

テレサもボクも互いに何も言わず、ワートホグを走らせた。

目の前を塞ぐように現れた海兵隊に取り付いたフラッドを何体跳ね飛ばしただろう。

中には見たことも在るような人たちもいた。

テレサは握り拳を作り、その光景からは決して目を逸らさない。

ボクも決してアクセルを押し込む足を緩める様な事はしなかった。

ダリオ二等軍曹はボクたちに「生きる」と言った。だから止まる事は出来ない。

それに、ここにフラッドが発生した事が確認されればシャドウ・オブ・インテントが特殊部隊を投下するか……或いは、上空からプラズマ砲を使ってこの辺り一帯を焼き野原に変えるかだ。

どちらにせよ。生存者は出来るだけフラッドにより汚染された場所から離れる必要がある。

「生き残っている基地に行きましょう。まだ、私たちは戦えるわ」

握り拳を緩め、バトルライフルを手にしたテレサが前を見ながら言う。運転しながらだと横顔しか見ることが出来ないけれど、その表情には決意と覚悟が見て取れた。

死を覚悟したとかそういうのじゃない。戦って生き残る覚悟……。

正直に言っ、ボクはこんなにも気高い人を好きになれてよかったと思う。

いまの大分裂が起きる前、ある方が言っていた「將軍であろうと一兵士であろうと、人類は名誉の為に我々の力に抗う」と、これは分裂前からすでにエリート族が人類を認めていたという事に他ならないんだ。

だからボクはテレサの為にだけに戦い。フラッドという脅威から彼女を守らなければいけない。

後にフラッドは、マスターチーフとアービターによって滅ぼされた。

しかし、その代償は大きく、多くのエリート族と海兵隊……。そして、マスターチーフを失う事となる。

戦没者達の葬儀がフッド提督により厳かに行われ、生き残った者たちは皆、慰霊碑に向かって敬礼を捧げた。

そして、アービターとフッド提督は握手を交わす。

フッド提督は最後までエリート族を許す事はしなかったが、熾烈な戦いの中でマスターチーフを支えてくれた事をアービターに感謝し、各基地で海兵隊と共に戦って散って行ったエリート族にも感謝の意を示した。

その意にアービターは頷き、慰霊碑に爪で117と刻み込み、地球上で散って行ったエリート族を誇り高き戦士としてエナジーソードを慰霊碑の前に置いて去って行く。

生き残った全てのエリート族は、故郷サンヘイリオスの無事を祈りながら帰っていった。

後に人類とエリート族改めサンヘイリとの間には和平が結ばれ、惑星間を互いに移動しながら文明を高めていったそうだ。

そして、人類とサンヘイリの子が誕生すると互いの種族としての垣根がなくなり、新たなフオアランナーとして銀河系に秩序をもたらす事になる。

力による支配ではなく、長く辛い戦いを共に戦い抜いた戦友として……。

ラスト・リゾート(Last Resort)(後書き)

次はキャラ設定のみ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5372z/>

Halo2.5:Beauty and the Beast

2011年12月29日11時47分発行